劉師培『中国歴史教科書』訳注（五）

Commentary on Liu Shih-p'ei's "Textbook of Chinese Ancient History" (V)

井澤　耕一
佐々木　満実

要旨および凡例

一、本稿は清末の学者劉師培（一八八四―一九一九）が光緒三十一年（一九〇五）から翌三十二年（一九〇六）にかけて出版した、『中国歴史教科書』第一冊・第六課・第七課・第八課を現代語訳し注釈を附したものである。ここでいう「中国歴史」とは、漢民族の起源から西周時代までの、いわゆる「孔子登場以前の中国史」を範囲としたものであり、古文（戦国期の字体のこと。この学派は経学の祖を孔子以前に置いた）経学者であった劉師培の思考に沿った歴史書だといえよう。本書と比すべき同時代の歴史書としては、夏曾佑（一八六三―一九二四）『最新中学教科書　中国歴史』全三冊（一九〇四―〇六）があり、井澤は、すでに「夏曾佑『最新中学教科書　中国歴史』訳注（四）」まで発表済みなので参照のこと。

二、本文は、『劉申叔遺書』所収の寧武南氏校版を底本とし、ほか万仕国校点『儀徴劉申叔遺書』（広陵書社、二〇一四年）所収本、横書き簡体字版『中国歴史教科書』（広陵書社、二〇一六年）を参照した。

三、本文と自注とを区別しやすくするために、本文は太字とし、本文中に挿入されている著者の自注は原書に従って小字とした。

四、〔注釈〕では可能な限り本文中の引用文の出典を明らかにし、それに誤りや不足がある場合、訂正、補足を適宜行った。

五、原文中の『　』は書名、術語などを強調する場合「　」を付した。また原文、訳文、注釈中の〔　〕及び（　）は訳注者によるもので、文字の校訂や文意の補足、術語の解説の際に用いた。

六、原文の表記には旧字体、注における引用文の表記には、常用漢字体・現代仮名遣いを用いた。

七、本稿作成に際して、まず井澤が草稿を作成し、それに基づいて、佐々木が、原文の推敲、歴史学の見地からの訳文の改訂、注釈の追加、図表の作成などを行った。

『人文社会科学論集』二号、一五-三一頁

© 2023　茨城大学人文社会科学部（人文社会科学部紀要）

井澤　耕一／佐々木　満実

第一冊

第六課　古代之地理　上

凡所謂「古代」者、由上古起、至殷代止。下文仿此。

漢族本居西方、及生齒日繁、乃以東方爲殖民之地、由西徂東、與異族雜處、猶之西班牙人初入美洲、英吉利人初入印度也。試卽中古代之地理考之。

一、闢地之先後。漢族東遷、蓋分二途。一由中亜細亜經天山北路、沿塔里木河以達陝・甘之西境、沿黃河流域進達河南・山東。自地皇興熊耳龍門山、見前。已沿黃河達雍・豫、而大騩氏・空桑氏・大巢氏・祝融氏之遺跡、皆在青・豫之間。見第二課。伏羲生成紀而都陳、神農產華陽而都曲阜、則由西方入中國、首及雍・梁、繼都青・豫、見第二課。皆沿黃河流域。此漢族奄有雍・梁・青・豫之始也。神農滅夙沙、始全有青州。一由衞藏之西、東行至打箭鑪、折而入蜀。自人皇氏出隄地之國、見第二課。而蜀之爲國、肇自人皇。其始、蠶叢・拍濩・魚鳧三君、各數百歲、同號蜀山。蠶叢居瞿上、今雙流縣。魚鳧治導江、今縣。逮蒲澤。不可考。其最後之君名望帝、而鉅靈氏亦跡躔於蜀。『路史』。厥後、黃帝之子青陽居江水、今岷江。○「青陽」卽少昊。昌意居若水。今金沙江。昌意娶蜀山氏女、以生高陽。『史記』。而舜生西域、今漢中。○『世本』。禹亦生石紐、今茂州。○『吳越春秋』。長於西羌。『帝王世紀』。此漢族奄有川・蜀之始也。人皇・蜀山氏由衞藏入蜀、青陽・昌意則由中國入蜀。厥後、漢族居黃河流域者、一由黃河達白河。自女媧氏平冀州、『淮南子』。而黃帝平蚩尤於涿鹿、北至釜山。今宣化。○『史記』。厥後、進而益西、故堯・舜・禹之都、皆在今山西地。見第三課、第四課。此漢族奄有幽・幷之始也。一由黃河越長江。自神農葬長沙、『帝王世紀』。黃帝登熊・今陝州。湘、今長沙府。

○『史記』。堯宅南交、今安南。○『書』堯典。舜崩蒼梧、今梧州。○『禮』檀弓。蓋由長江流域、進達湘江・西江。此漢族奄有荊・廣之始也。厥後復失。一由長江達浙水。禹會諸侯於會稽、『史記』。少康封少子於越、『史記』。此漢族奄有兩浙之始也。厥後夏征東夷、爲拓地海濱之始。殷征鬼方、爲拓地黔・滇之始。見後課。而中國之地、遂爲漢族宅居之壤矣。此可考者一也。

二、疆域之廣延。伏羲以前、漢族之疆域荒渺難稽、然大抵中國之疆域、與西方合一、以西方爲祖國、以中國爲殖民地。故神農甄度四海、東西九十萬里、南北八十二萬里。『春秋命曆序』。神農以上、有大九州。中國分九州、卽法古大九州也。黃帝以來、德不及遠、惟有神州之內。『帝王世紀』。則中國與西方分立、始於黃帝之時。此後中國與西方尙交通不絶。黃帝疆域、東至於海、西至於空桐、今甘肅。南至於江、北至釜山、『史記』。顓頊之地、北至幽陵、幽州之北。南至交趾、西至流沙、今安西州附近。東至蟠木。不可考。○『史記』。帝堯之地、東至嵎夷、今登州地。南至南交、北至朔方、今內蒙古鄂爾多斯。西至西土。蓋西土甚廣、故不言其境界所及。○『書』堯典。夏禹之地、東漸於海、西被流沙、禹貢。南至衡山、今山。北至恆山。今山。○禹貢注。迮鶴壽『夏九州分土疏證』序云、「夏地凡積千一百三十八萬七千三百七十九里、開方之、得三千三百七十四里有半少强」。而商代疆域、遠遜前朝、東至泰遠、不可考。西至邠國、南至濮鉛、今湖南。北至祝栗。卽涿鹿○『爾雅』釋地。李巡、郭璞皆以爲殷制。今本之。以觚竹・今永平府。北戶・今安南。西王母・卽古亜西利亜國。日下卽嵎夷。爲四荒。『爾雅』釋地。故西不盡流沙、南不盡衡山、東不盡東海、北不盡恆山、『禮』王制鄭注多以爲殷制、是也。○迮鶴壽『殷九州分土疏證』序曰、「殷地凡積千有五十五萬六千二百六十五里、開方之、得三千二百四十九里少强」。足證商代疆域之小矣。此可考者二也。

〔現代語訳〕

ここでいう「古代」とは、上古より殷代までを範囲とする。以下同じ。

漢民族は本来西方に居住していたが、人口が日々増加するに及んで、東方を植民地として西から東へ移り、（先住していた）異民族（苗族）と雑居するようになった。それはスペイン人が最初にアメリカへ、またはイギリス人が初めてインドに入った時と同様である。[1] 試みに中国古代の地理について以下考察していく。

一、開拓の順序。漢民族の東遷は、およそ二つの経路を辿ったと思われる。第一は、中央アジアから天山北路を経、タリム河に沿って、[2] 陝西・甘粛の西境に達し、その後黄河流域に沿って、河南・山東に至る経路である。地皇が熊耳・龍門両山に興って以降、前の課（第一課）参照。（漢民族は）とうに黄河に沿って、雍州・豫州に達していた。また大騩氏・空桑氏・大巣氏・祝融氏の足跡がいずれも青州・豫州にあったこと、第二課（・第七課）参照。伏羲が成紀に生まれ陳に都を置き、神農が華陽に生まれ曲阜を都とした（第二課参照）ことからも、（漢民族が）西方より中国に入って後、最初雍州・梁州に至り、次いで青州・豫州に都を置いたが、第二課参照。それら全てが黄河流域に沿っていたことが明らかとなろう。これは漢民族が雍・梁・青・豫の各州を領有した始まりとなった。神農は夙沙を滅ぼして後、青州全域を領有した。[3] 第二は、衛蔵の西より、東へ進んでダルツェンド（中国四川省カンゼ・チベット族自治州康定市）で折れて蜀に入る経路である。人皇氏が隄地国の出身であることから、第二課（正しくは第一課、そこでは「提地国」に作る）参照。蜀が国として建てられたのは、人皇氏を起源とする。初め蚕叢・拍濩・魚鳧の三君が立ち、各々数百歳まで生き、いずれも蜀山氏と称した。（目が縦であったと伝えられる）蚕叢は瞿上を支配し、今（清末）の双流県（現四川省成都市双流区）。魚鳧は導江を治め、今は県（清末当時は灌県、現四川省成都市都江堰市）。[4] その支配は蒲沢にまで及んだ。場所については考証できない。最後の君主は望帝という名であった。また鉅霊氏もその足跡を蜀に残している（第二課参照）。『路史』参照。その後、黄帝の子、青陽は江水に、今の岷江。○「青陽」は少昊にほかならない（第三課参照）。昌意は若水に居した。今の金沙江。[5] 昌意は蜀山氏の娘を娶り、高陽（顓頊）が生まれた。『史記』（五帝本紀）参照。そして舜は西域に生まれ、今の漢中府（現陝西省漢中市一帯）。○『世本』参照。禹も石紐に生まれ、今の茂州（現四川省アバ・チベット族チャン族自治州茂県）。○『呉越春秋』（越王無余外伝）参照。西羌で育った。『帝王世紀』参照。これは漢民族が川・蜀地方を領有した始まりとなった。人皇・蜀山氏は衛蔵から蜀に入り、青陽・昌意は中国から蜀に入った。[6] その後、黄河流域に居住した漢民族は、第一に黄河から（北上して）白河（河北、北京を含む華北地方を流れる。下流は永定河）に到達する路をたどった。女媧氏が冀州を平定して以降、『淮南子』（覧冥訓）参照。黄帝は涿鹿において蚩尤を伐ち、北上して釜山に至り（諸侯と割符を合わせた）。今の（直隷省）宣化府（現河北省張家口市）。○『史記』（五帝本紀）参照。その後、漢民族は西進を続け、堯・舜・禹の都はすべて今の山西の地に置かれたのである。第三課、第四課参照。これは漢民族が幽州・并州を領有した始まりとなった。第二は、黄河から（南下して）長江を越える路である。神農が長沙に葬られて以降、『帝王世紀』参照。黄帝は熊山・今の陝州（現河南省三門峡市及び山西省運城市にまたがった地域）にあった。湘山に登り、今の長沙府（長沙市を中心とした湖南省北東部）にあった。○『史記』（五帝本紀）参照。[7] 堯は南交に居住し、[8] 今の安南。○『尚書』堯典参照。舜は蒼梧に崩御したが、今の梧州（現広西チワン族自治区梧州市）。○『礼記』檀弓篇上参照。おそらく（漢民族が）長江流域より、湘江・西江（華南）に南進していたのだろう。これは漢民族

が荊州・広州を領有した始まりとなった。その後再び喪失した。第三は、長江より浙水（銭塘江）に至る路である。禹は諸侯と会稽山にて会見し、『史記』（夏本紀贊）参照。（夏王）少康は末子を越に封じた。『史記』（越王句践世家）参照。これは漢民族が両浙を領有した始まりとなった。その後、夏は東夷を征服したが、これは（漢民族が）海浜地方を開拓した始まりとなった。殷は鬼方を征服したが、これは黔（現貴州省）・滇（現雲南省）を開拓した始まりとなった。後の（第十一）課を参照。かくて中国の地は漢民族の居住地となった。以上が考察すべき一点目である。

二、領土の拡大。伏羲以前、漢民族の領域とするところは明確ではなく考証するのは難しい。つまり当時の中国の領域は、おおむね西方と一体になっており、西方を本国、中国を植民地としていた。そのため神農は四海を測って、東西を九十万里、南北を八十二万里としたのである。『春秋命暦序』参照。神農以前、国土は大九州であったが、のちに中国が九州に分けられた際、古の大九州の分割法に則った。黄帝以降その徳は遠方に及ばす、神州内にとどまった。『帝王世紀』参照。[9] そうなると中国が西方と分立したのは、黄帝の時代から始まったといえよう。それ以後も中国と西方とは通交が絶えなかった。黄帝時代の領域は、東は東海、西は空桐、今の甘粛省（平涼市にある崆峒山の異名か）。南は長江、北は釜山までであった。『史記』（五帝本紀）参照。顓頊時代の地は、北は幽陵、幽州（現河北省）の北。南は交趾、西は流沙、今の安西州（現甘粛省酒泉市）付近。東は蟠木までであった。場所がどこにあったのかは考証できない。○『史記』（五帝本紀）参照。帝堯時代の地は、東は嵎夷、今の登州（現山東省煙台市・威海市一帯）の地。南は南交、北は朔方、今の内蒙古（現内モンゴル自治区）オルドス市。西は西土までであった。西土が極めて広大だったため、その境界の範囲については言及されていない。○『尚書』堯典篇参照。夏禹時代の地は、東は東海、西は流沙、（『尚書』）禹貢篇参照。南は衡山、今も同じ山名。北は恒山までであった。今も同じ山名。○（『尚書』）禹貢注参照。迮鶴寿（一七七三―一八三六）『夏九州分土疏証』序にいう、「夏の地の総面積は千百三十八万七千三百七十九里、開平法で平方根を求めれば、三千三百七十四里二分の一強である」。つまり商（殷）代の領域は前朝よりかなり縮小し、東は泰遠、場所については考証できない。西は邠国、南は濮鉛、今の湖南省。北は祝栗までであった。（前述の）涿鹿にほかならない○『爾雅』釈地篇参照。（後漢）李巡、（東晋）郭璞は以上の区分を殷の制度と考えているが（『爾雅』邢昺疏参照）、今はその説に従う。そして觚竹・今の永平府（現河北省秦皇島市）。北戸・今の安南。西王母・古代アッシリア帝国（現イラク北部）にほかならない。日下（前述の）嵎夷にほかならない。を四荒とした。『爾雅』釈地篇参照。そのため西は流沙、南は衡山、東は東海、北は恒山にも至らず、『礼記』王制篇鄭玄注は、その大半を「殷」の制度と考えているがそれは正しい。○迮鶴壽『殷九州分土疏証』序にいう、「殷の地の総面積は千五十五万六千二百六十五里、開平法で平方根を求めれば、三千二百四十九里余りである」。ここから商代の領域が狭小であったことが明らかとなろう。以上が考察すべき二点目である。

〔注釈〕

（1）本文の記述は、本書第一課、さらに本書刊行の二年前に出版した劉師培『中国民族志』（一九〇三年刊）第一章・第二章に基づいている。劉師培は、第一章冒頭で、桑原隲蔵（一八七一―一九三一）『中等東洋史』（一八九八年刊、『全集』第四巻、岩波書店、一九六八年）第三章「人種」の記述、漢（民）族が「蓋し悠遠なる時代に於て、西方より支那内地に移住し来たりて、黄河の沿岸に棲息し、次第に四方に蕃殖せし者に似たり」を引き、かつその説を肯定している。このように、劉師培は漢民族が西方から東方へ移住したと説いているが、それは第一課既出のテリア

ン・ド・ラクペリのほか、桑原（ただし彼自身はラクペリ説に対しては疑念を抱いている）、間接的ではあるが桑原説に多大な影響を与えたドイツの地理学者リヒトホーフェン（Ferdinand von Wilhelm Richthofen、一八三三―一九〇五）の"China, Ergebnisse eigener Reisen"（一八七七―）の所説に拠っていることが理解できよう（桑原隲蔵「支那の太古に関する東洋学者の所説に就き」、一八九六年刊、『全集』第一巻所収、一九六八年）。桑原書は一八九九年には早くも『東洋史要』という書名で、上海・東文学社から翻訳本が刊行されており、東洋史教科書の藍本となった（田雁『近代中国の日本書翻訳出版史』東京大学出版会、二〇二〇年、五〇頁）。

（2）原文では「一由中亜細亜経天山北路沿塔里木河以達陝甘之西境」となっているが、本来タリム河はタクラマカン砂漠の北縁、すなわち天山南路側を東流しており、実情と合致しない。劉氏が本書と同時期に刊行した『中国地理教科書』第一冊・第十一課・河流四ではタリム河について、現新疆ウイグル自治区西部のカシュガル河・ヤルカンド河を源流とし、途中アスク河・和田河と合流し、タクラマカン砂漠東部にあるコルラで北と東に分流すると記述している。劉氏はその北流する河を「開都河」とし、ボステン湖（バグラシュ湖とも。現新疆ウイグル自治区バインゴリン・モンゴル自治州バグラシュ県）に流入していると説いているが、実際には、北の天山山脈の雪解け水を源とする「開都河」が南流して、ボステン湖に注ぎ、そこから発した「孔雀河」がさらに南流して、タリム河の分流と合するという逆の方向を辿っている。おそらく劉氏は「開都河」を、本文中の「塔里木河」とみなし、それに拠って、漢民族が天山山脈の北側を経て西遷したと考えたのではないだろうか。

（3）「夙沙」は『逸周書』史記解篇では「質沙」に作る。なお『呂氏春秋』離俗覧・用民篇他は「夙沙の民、自ら其の君を攻むるも、神農に帰す」として、神農は夙沙を滅ぼしたのではなく、服従させただけと述べている。劉氏自身も『読書随筆』において、「夙沙」を「肅慎」の転音で、ツングース系民族が建てた国であると考証し、さらに彼の国が神農の攻撃によって、満洲に撤退したと記している。

（4）古蜀王の系譜と治所については、『華陽国志』巻三・蜀志「周は綱紀を失い、蜀は先に王を称す。蜀侯蚕叢有り、其目は縦にして、始めて王を称す。死して、石棺・石椁を作る。国人之に従うが故に俗に石棺椁を以て縦目人の冢と為すなり。次王は柏灌と曰い、次王は魚鳧と曰う。魚鳧王は瀕山に田し、忽ち仙道を得。蜀人之を思い、為に祠を瀕に立つ。（中略）治を郫邑に移し、或いは瞿上を治む」に詳しい。一九八六年に四川省徳陽市で発見された三星堆遺跡からは「縦目仮面」と呼ばれる両目が特徴的な青銅製の仮面も出土しており、古蜀王蚕叢との関連が指摘されている。また「導江」は、劉氏が注するように旧県名であり、現四川省成都市内の都江堰（前三世紀中頃に、彼の地の太守であった李冰および二郎父子が築いた、岷江を利用した灌漑施設）周辺を指している。

（5）金沙江は長江上流の一名称であるが、現在の四川省宜賓市にて岷江と合流し、その後は長江と称される。劉氏が、岷江・金沙江に漢民族の酋長である黄帝の二子が、それぞれ住んでいたとする伝説を採ったのは、漢民族が上古より長江上流に居住し、そこを支配していたことを証しようとしたためではないだろうか。

（6）青陽・昌意の父である黄帝は、寿丘（現山東省曲阜市内）に生まれ、神農氏に代わって、涿州（現河北省涿州市）に都を定め、死後橋山（現陝西省延安市）に葬られており、実際四川には足を踏み入れていない。その代わりに「中原より」長子の青陽を江水に、次子の昌意を若水に派遣して、その一帯を統治させた、ということである。

（7）劉氏は熊山を河南省の黄河流域内にあったと考証している。しかし彼が拠った『史記』五帝本紀「熊・湘に登る」の『正義』には「『括地志』に云う、熊耳山は商州上洛県（現陝西省商洛市）西十里に在りて、斉桓公、之に登りて以て江漢を望むなり」とあり、それに拠れば熊耳山は漢江上流域にあり、陝州からは西南に約三百キロメートル離れている。

（8）『尚書』堯典篇原文では「申ねて羲叔に南交に宅るを命ず」となっており、堯自らは南交に居住してはいない。

（9）本文「神農以前、国土は大九州であった」以下は、『帝王世紀』には見えず、『周礼』夏官・職方氏・賈公彦疏に引用されている。なお顧炎武（一六一三―八二）『日知録』巻二十二「九州」にもこの疏が引かれている。

第七課　古代之地理　下

三、疆土之區劃。據中國古籍所言、或言人皇分九州、『尚書璇璣鈐』。或言女媧氏時有九州、『淮南子』。或言共工氏霸九州、『禮記』祭

法。**或言黃帝畫九州**、『帝王世紀』。**或言顓頊制九州**、『通典』。**咸荒渺不足信**。**九州之分、始於禹平水土。帝都所在爲冀州**、今山西・直隷。**濟・河惟兗州**、濟水北、河水南、今直隷東南・山東西南之境。其東爲青州。**海・岱惟青州**、海以西、泰山以東及山東省東境。**海・岱及淮維徐州**、海以西、泰山以南、淮以北、今山東南境・江蘇北境及安徽東北一隅。**淮・海維揚州**、淮以南、海以西、今江蘇・安徽南境全境、浙江・江西北境皆是。○或言揚州有閩・廣、然『山海經』言「甌在海中」「閩在海中」「三天子都、東南卽爲海水」、今溫州及福建全省、當時四海臨海、不與陸通、與今臺灣同、卽揚州之島夷也。今溫州達處州之甌江、卽當日海水之故迹也。兩廣爲當日苗蠻窟宅、禹地僅至衡山、亦不屬揚州。**荊及衡陽維荊州**、荊山南、衡山北。今湖北南境・湖南北境。**荊・河維豫州**、荊山北、河水南、今湖北北境及河南黃河以南之地。**華陽・黑水維梁州**、華山西南、黑水東、今陝西南境・甘肅東南及四川全省地。**黑水・西河維雍州**。黑水東北、西河西南、今陝・甘北境及嘉峪關外之地皆是。**是爲九州**。『尙書』禹貢。**然舜以冀州之北廣大、分置幷州**。今山西北境。○『書』堯典馬注。又鄭注言「分衞爲幷州」、恐非。**以青州越海、分置營州**、今奉天府。**又分燕以北爲幽州**、今直隷省北境。○堯典鄭注。**共十有二州**。『書』堯典。**及禹卽位、復爲九州**。『吳越春秋』言「啓悉九州之土」、則夏代復九州、明矣。**又、唐堯之時、設立五服之制。去王城五百里者爲「甸服」、其外五百里爲「侯服」、又其外五百里爲「綏服」、又其外五百里爲「要服」、又其外五百里爲「荒服」。四方相距、共方五千里。禹時疆域增廣、故「弼成五服」、「弼成」者、廣輔之義也。於每服之外、各增地五百里、故四方相距、共方萬里**。『虞書』皐陶（謨）篇「弼成五服、至於五千」及『夏書』禹貢「五百里甸服」一節鄭注。○按、『尙書』今文家歐陽・夏侯說、中國方五千里。『史記』亦言、五服中、每服相去僅五百里。禹之五服、與堯不殊、此一說也。鄭注用古文說、馬融亦言、面五千里、爲方萬里。是鄭與馬同。許氏『五經異義』駁今文說云、「以漢地考之、自黑水至東海、衡山至朔方、

經略萬里」。案、漢代里制、較夏爲廣。以漢地證夏地、尙廣延萬里、則鄭說確不可易矣。蓋堯時有洪水之災、四方各爲異族所佔、故中國僅方五千里。禹時攘斥夷狄、拓啓疆土、故疆土廣延萬里。鄭說是也、故從之。**然中國九州、僅方七千里。若荒服及要服之半、則夷狄所居、亦名「四海」**。『王制』疏引鄭玄『周易』注及『書』禹貢「五百里甸服」節鄭玄注。**禹於要服奮武衞、所以防夷狄之內侵耳。夏末旣衰、夷狄內侵、土地減少。殷湯承之、制中國、方三千里、亦分爲九州**。鄭玄『駁五經異義』及『禮』王制注。**兩河間曰冀州**、由東河至西河、地與夏同、惟無直隷・山西北境。**河南曰豫州**、自南河至漢水、地與夏同、惟南境稍廣。**河西曰雍州**、自西河至黑水、地與夏同、疑西北境稍狹。**漢南曰荊州**、自漢水至衡山、地與夏同、惟北境稍狹。**江南曰揚州**、自河南至海、地與夏同、惟北無淮南地、而南境疑亦稍狹。**濟・河間曰兗州**、自河水至濟水、地與夏同。**濟東曰徐州**、自濟東至海、地與夏同、惟兼有淮南地。**燕曰幽州**、直隷・山西北境。**齊曰營州**、卽夏青州。**是爲商代九州之制**。『爾雅』釋地。**九州亦名「九域」**、商頌『韓詩』。**亦名「九有」「九圍」**。商頌『毛詩』。**又殷代之制、設立侯・甸・男・衞四服**。『書』酒誥云「在昔殷先哲王」。下云、「越在外服、侯・甸・男・衞邦伯」。『白虎通』引作「侯・甸・保・衞作國伯」、亦指爲殷制。蓋『酒誥』之文多訛空。「邦伯」必指國中之「伯」言、故王西莊・孫淵如皆不釋「邦國」爲服名。**蓋每服方五百里、四方相距共四千里、中國方三千里、則衞服當爲夷狄之地矣**。考商無梁州。蓋巴・蜀已自立爲國、而荊州亦爲荊楚所佔、故武丁奮伐之。揚州東南、卽爲荊蠻、泰伯所適者是也。而西北亦爲戎狄所佔、故僅方三千里也。**又、虞・夏之時、以岱宗**・卽泰山。**南岳**・卽霍山。**西岳**・卽華山。**北岳**・卽恒山。**嵩高**・卽嵩山。**爲五岳**、『書』堯典、『伏生大傳』。**以江・淮・河・濟爲四瀆**。『爾雅』釋水。○下云「禹所名」。**商代之時、以大野・大陸・楊陓**・今涿州。**孟諸・雲夢・具區**・今太湖。**海隅**・山東海岸。**昭余祁**・今祁縣。**圃田**・今中牟縣。**焦護**・今涇陽縣。**爲十藪、以阞**今廬江縣。**及息愼**疑南陵縣。

威夷・今隴州。朱滕・不可考。西隃・今代州。加陵・今河南省。溴梁・今溫縣。河墳今濬縣。爲八陵。『爾雅』釋地。此可考者三也。

惟古代之時、未立國號。卽稱「華夏」者、亦鮮以帝都所在、定爲國號之稱。神農居曲阜、地隣齊・魯、則以齊州稱中國。『爾雅』釋地。黃帝・堯・舜均都冀州、則以冀州稱中國。『穀梁傳』及『楚詞』。舜稱其民曰「庶虞」、『大戴禮』四代篇。周稱殷民曰「庶殷」、『書』召誥。則又以朝名爲種名矣。此其所以無一定之國號也。古代地學、發明最先。蒼頡言「地一行一度、風輪扶之」、岐伯言「地爲大氣所舉」、皆地學之精言。『虞書』有「九共篇」、劉原父以爲卽古「九丘」、乃古代詳記九州之書、與禹貢同。

〔現代語訳〕

三、領土の区画。中国古籍の所説には、人皇が九州を分けた、『尚書璇璣鈐』参照。女媧氏の時には九州があった、『淮南子』（覽冥訓）参照。共工氏が九州を制覇した、『礼記』祭法篇参照。黄帝が九州を区画した、『帝王世紀』参照。顓頊が九州を制定した『通典』（州郡序）。などがあるが、すべてあいまいで信じることはできない。やはり九州の区分は、禹が国土を平定したときに始まったのである。帝都の所在地は冀州[1]、今の山西・直隷（現山西・河北省）。済水から黄河までの間は兗州、済水以北及び黄河の南、今の直隷省（現河北省）の東南、山東省の西南部に該当する。それより東は青州である[2]。東海から岱山までの間は青州、東海より泰山の間および山東省東部一帯。海・岱山から淮河までの間は徐州、東海より西、かつ泰山以南から淮河以北の間。今の山東省の南部、江蘇省の北部、かつ安徽省の東北部に該当する。淮河から東海までの間は揚州、淮河以南で東海より西の一帯。今の江蘇省および安徽省の南部、さらに浙江省・江西省の北部にまで及ぶ。〇〔胡渭（一六三三―一七一七）『禹貢錐指』などは〕揚州は閩広（福建・両広）地方にまで及ぶと説いている。『山海経』には「甌は海中に在（原文では「居」）り」「閩は海中に在り」および「三天子都（山）の東南は即ち海水なり」とある[3]。今の（浙江省）温州及び福建全省は、当時周囲を海に囲まれており、陸地と繋がっておらず、今の台湾と同じで、揚州の島嶼部であった。今温州から（上流域の）処州（現浙江省麗水市）に達する甌江は、その時彼の地が海であったことを示している。（広東・広西の）両広は当時苗族の居住地域であり、禹の領地が（現湖南省衡陽市の）衡山までであったため、（両広地方は）揚州に属していなかった。荊山から衡山の南側までの間は荊州、荊山の南から衡山の北の間。今の湖北省と湖南省との境に該当する[4]。荊山から黄河までの間は豫州、荊山の北から黄河の南の間。今の湖北省北部から河南省内の黄河流域以南一帯に該当する。華山の南から黒水までの間は梁州、華山の西南から黒水以東の間。今の陝西省南部、甘粛省東南、さらに四川省全域にまで及ぶ。黒水から西河までの間は雍州であり、黒水の東北から西河（現山西・陝西省間を南流する黄河）の西南までの間。今の陝西省・甘粛省の北部、かつ嘉峪関以西の地にまで及ぶ。以上が九州となる。『尚書』禹貢篇参照。しかし舜は冀州の北部が広すぎたため、冀州を分けて新たに幷州を置いた。今の山西省北部である。〇〔孫星衍（一七五三―一八一八）『尚書今古文注疏』・王鳴盛（一七二二―九七）『尚書後案』所引の〕『尚書』堯典篇馬融注参照。鄭玄注は「衛を分かちて幷州と為す」としているが、恐らくそうではない。さらに青州（山東半島）から海を越えて、営州（今の奉天府（現遼寧省瀋陽市）。）を置き、さらに燕以北を分割して幽州を置いて、今の直隷省北境一帯である。〇『尚書』堯典篇鄭玄注参照。計十二州となった。『尚書』堯典篇参照。禹が即位すると、再び九州に戻した。『呉越春秋』（越王無余外伝）には「（禹王の子であった啓は、……禹貢の美徳に遵い）九州の土を悉して、以て五穀を種」とあり、夏代で九州制に復されたことは明らかである。さらに唐堯の時、五服（または畿服）の制が制定された。王城から五百里ま

でを「甸服」、甸服から五百里（起点である王城からは千里）までを「侯服」、侯服から五百里（王城からは千五百里）までを「綏服」、綏服から五百里（王城からは二千里）までを「要服」、要服から五百里（王城からは二千五百里）までを「荒服」とした。（王城を中心とする正方形の辺が）四方に伸びていき、国土の一辺は五千里となった。[5] 禹の時代、国土がさらに拡大し、そのため「五服を弼成」して、「弼成」とは、「輔助し拡大する」の意。五服それぞれに五百里の地が追加され、加えてそれが四方に拡大したことで、一辺が倍の一万里となった。[6]『尚書』虞書・皐陶（謨）篇「弼成五服、至於五千」及び夏書・禹貢篇「五百里甸服」の鄭玄注を参照。○思うに、（『尚書今古文注疏』によれば）『尚書』今文経学派の歐陽氏・夏侯氏の説では、中国は一辺が五千里で、『史記』（夏本紀）の説も同じである。すなわち、五服制では、一服ごとの距離は五百里にすぎず、禹の時代の五服も堯代と同じであった。以上が今文経学派の学説である。次に鄭玄注は古文経学説を用いており、馬融も同様で、中国の国土は、一方向の拡がりが最大五千里に達し、そのため国土の一辺は一万里にまで至った。[7] この点について鄭玄説と馬融説は一致している。また許慎は『五経異義』において、前述の今文経学説に反駁して、「漢地を以て之を考うれば、（国土の西にある）黒水より（東にある）東海に至り、（南にある）衡山（の陽）より（北にある）朔方に至れば、万里を経略す」と述べている。思うに、漢代の里制（区画）は、夏のそれと比べて拡大しており、[8] よって（鄭・馬・許氏が生きた後）漢の区画を基に夏代のそれを考証すれば、その広さは一万里にまで拡大する。とすると鄭玄の説は確かに不易の定説と言えよう。[9] 思うに、堯の時に洪水が発生し、四方はそれぞれ異民族によって占領されたため、中国の国土は一辺が五千里にまで減少した。禹の時代に入ると夷狄を排斥し、領土を再び拡げたため、国土は一辺が一万里にまで倍増したのである。（この過程を正確に描写した）鄭玄の説はその通りで、よってそれに従う。**とはいえ国土自体は、一辺が七千里にすぎず、荒服及び要服の半分には夷狄が居住しており、よって「四海（九夷・八狄・七戎・六蛮）」とも称されたのである。**『礼記』王制篇疏所引の鄭玄『周易注』及び『尚書』禹貢篇「五百里甸服」中の鄭玄注参照。**禹が「要服」において防衛のために武力を振るったのは、[10] 夷狄の侵入を防ぐためであった。夏の末期に国は衰え、夷狄が侵入し、その領土は減少していった。殷・湯王はそれを承け、中国を制した際、一辺三千里の国土を九州に分割せざるを得なかったのである。**鄭玄『駁五経異義』及び『礼記』王制篇注参照。**東西両河間を冀州、**東河（現河南省武陟県以東の黄河）より西河までの領域で、州土は夏と同じではあるが、ただ直隷・山西の北部は含まれていない。**黄河の南を豫州、**南河（黄河の潼関以東流域）より漢水（現在の漢江は陝西省漢中市より発し、湖北省武漢市にて長江に合流）に至るまでで、州土は夏と同じではあるが、南部はやや拡大した。**黄河の西を雍州、**西河より黒水までで、州土は夏と同じであるが、西北一帯は縮小している。**漢水の南を荊州、**漢水から衡山までで、州土は夏と同じであるが、北部はやや縮小した。**長江の南を揚州、**河南より東海までで、州土は夏と同じだが、北は淮南の地を含まず、南部はやや縮小している。**済水と黄河の間を兗州、**黄河から済水までで、州土は夏と同じである。**済水の東を徐州、**済水の東から東海までで、州土は夏と同じだが、淮南の地を含む。**燕を幽州、**直隷省と山西省の北部。**斉を営州、**夏代の青州。**以上が殷代の九州の制である。**『爾雅』釈地篇参照。**九州の別称は「九域」**〔王先謙（一八四二―一九一七）『詩三家義集疏』所収〕『韓詩』商頌・玄鳥篇参照。**また「九有」「九囲」ともよばれた。**『毛詩』商頌・玄鳥及び長発篇参照。**さらに殷代の制度として侯・甸・男・衛の四服が設置された。**『尚書』酒誥篇「在昔、殷の先哲王」の後の「外服に越んでは、侯・甸・男・衛・邦伯」について、『白虎通義』爵篇は、それを引用して「侯・甸・保・衛は、国伯と作す」と述べ、殷の爵位と考えた。思うに酒誥篇の文は

大半が誤りや空疎なものである。とすれば「邦伯」は国内の「伯」、すなわち爵位について述べており、そのため（前出の）王西荘（鳴盛）・孫淵如（星衍）はともに「邦国」を服名とは解釈していない。**思うに一服ごとに五百里ずつ拡大させ、国土の四方を伸ばしていくと、国土は一辺四千里まで拡大するが、その内中国（の領域）は一辺三千里にとどまり、四服の最も外縁に当たる衛服は夷狄の地となるはずである。**考えてみると殷には梁州が含まれていない。おそらく巴・蜀もすでに国として独立し、さらに荊州も荊楚によって支配された。よって武丁は奮ってこれを伐ったのである。揚州の東南部は、当時は荊蛮とされ、（呉の始祖である）泰伯が赴いたのはその地であった。また西北も戎狄によって占領されていたため、（当時の国土面積は）わずか方三千里にとどまった。**さらに、虞（舜）・夏（禹）の時、岱宗**・泰山にほかならない。**南岳**・霍山（『尚書大伝』禹貢篇の記述による。現安徽省安慶市内の天柱山。現在南岳と目される湖南省衡山より約七百キロ北東）にほかならない。**西岳**・華山にほかならない、**北岳**・恒山にほかならない。**嵩高** 嵩山にほかならない。**を五岳とし、**『尚書』堯典篇および伏生『尚書大伝』（禹貢篇）参照。**長江・淮水・黄河・済水を四瀆（大河）とした。**『爾雅』釈水篇。○次の課では「禹が命名した」と述べている。**殷代において、大野（その後鉅野沢、梁山泊と呼ばれた）・大陸（第八課に後出）・楊陓**・今の涿州。**孟諸・雲夢・具区**・今の太湖。**海隅**・山東省の沿海部。**昭余祁**・今の祁県（現山西省晋中市内）。**圃田**・今の中牟県（現河南省鄭州市内）。**焦護** 今の涇陽県（現陝西省咸陽市内）。**を十藪（湖沢）とし、阞** 今の廬江県（現安徽省合肥市内）。**及び息慎**・おそらく南陵県（現安徽省蕪湖市内）。**威夷**・今の隴州（現陝西省宝鶏市及び甘粛省平涼市一帯）。**朱滕**・場所は不明。**西隃**・今の代州（現山西省忻州市一帯）。**加陵**・今の河南省。**溴梁**・今の温県（現河南省焦作市）。**河墳** 今の浚県（現河南省鶴壁市内）。**を八陵（丘陵）とした。**『爾雅』釈地篇参照。**以上が考証すべき三点目である。**

ただ古代において、国号を立てずに「華夏」と称したのは、帝王の都の所在地を国号とすることが少なかったからである。神農は曲阜に住んでいたが、その地は斉・魯と隣接しており、よって斉州を中国と称した。『爾雅』釈地篇参照。**黄帝・堯・舜はいずれも冀州に都を置いたので、冀州を中国と称したのである。**以上『春秋穀梁伝』（僖公二年）及び『楚辞』（九歌・雲中君篇）参照。**舜はそこの民を「庶虞」とよび、**『大戴礼』四代篇参照。**周は殷の民を「庶殷」とよんだが、**『尚書』召誥篇参照。**それは王朝の名を用いて、その民を称した例である。これこそ（古代において）定まった国号が無かった理由である。**古代の地理学は最も歴史が古く。蒼頡は「地は（毎）一（日）行くこと一度、風輪之を扶く」（『易緯乾坤鑿度』巻下）、岐伯も「地は大気の挙ぐる所なり」（『黄帝内経素問』五運行大論篇）と述べているが、地理学の至言といえるだろう。『尚書』虞書には（本来）「九共篇」が存在したが、劉原父（敞、一〇一九―六八）は、それを古代の「九丘」、すなわち古代九州を詳述したものとして、「禹貢」と同じ地理書であっただろうと述べている（『七経小伝』巻上・尚書）。

〔注釈〕

（1）以下「以上が九州となる」までの記述は、『尚書』禹貢篇に拠ったものである。禹貢篇ではまず「禹、土を敷き、山に隨い木を刊りて、高山・大川を奠む」として、禹が治水を中心に国土整備に腐心したことを述べる。その後「冀州既載壺口治梁及岐。既修太原、至於岳陽。覃懐底績、至於衡漳。厥土惟白壤、厥賦惟上上錯、厥田惟中中。恆・衛既、大陸既作。島夷皮服、夾右碣石入於河」と続く。「冀州既載壺口治梁及岐」の解釈は種々あるが、劉氏はその詳細には触れず、孔穎達疏所引の鄭玄注「時に帝之を都とす」に従って、冀州を当時の都と記述した。

（2）以下は禹貢篇の引用だが、そこでは「【山川名など】維【州名】」と記し

て、まず国土を山、川、海を境にして区画し、それに州名を付す方法を採っている。各州、山川などの位置については、篇末の松本愚山『五経図彙』所載の絵図を参照。

（3）劉師培注は『山海経』海内東経「浙江は三天子都より出て、其（蛮か？）東に在り、（蛮東は）閩の西北に在りて、海に入る。（浙江の河口は）余暨（現浙江省杭州市蕭山区）の南なり」に拠ったものか。三天子都は山名、それが海に面している閩の「西北」に在るということは、「三天子都の東南は即ち海水なり」の記述通りともいえる。

（4）本文の「荊及衡陽」、すなわち「荊山から衡山の南」と劉氏注「荊山南・衡山北」間には齟齬がある。そもそも『尚書』の文には、南限であるはずの衡山の「陽」が記されているなど矛盾がみられる。おそらく脱文・衍文があるのではないか。

（5）鄭玄説に基づいた堯時代の「五服制」については、篇末の図①を参照。

（6）鄭玄説に基づいた禹時代の「弼成五服」については、篇末の図②を参照。

（7）ここでの計測法は、『尚書正義』禹貢篇・孔穎達疏「凡そ五服の別、各おの五百里なり。是れ王城の四面よりして、面の別るること（一方向のみの拡大）二千五百里なり。四面の相い距たること方（双方向の拡大の合計）五千里なり」に拠る。

（8）邱光明『中国歴代度量衡考』科学出版社、一九九二年には殷墟から出土した殷代の尺が掲載されているが、その一尺は十五・八センチメートルである。それに対し漢代の尺はおおむね二十三センチメートルで、殷尺の一・五倍となっている。

（9）孫星衍『尚書今古文注疏』巻二の疏に拠れば、尚書今文説はあくまでも『尚書』本文「至于五千」を遵守するために、「今尚書欧陽・夏侯説に中国は方（国土の一辺）五千里なり」（『礼記正義』王制篇疏所引『五経異議』）と主張する。それに対して、鄭玄が説く古文説では、注（6）のように、「弼」を補って「五服は已に五千にして、又た弼成して万里と為す」（『尚書正義』益稷篇疏）と説いている。

（10）『尚書』禹貢篇は「五百里は綏服なり。三百里は文教を揆り、二百里は武衛を奮う」と説き、防衛の為に武力を行使するのは、「要服」の一段階内側の「綏服」の範囲内としている。本文の記述は劉氏の誤りか。

第八課　禹平洪水

洪水之禍、始於女媧氏。時四極廢、九州裂、水浩洋不息。於是女媧氏斷鰲足、以立四極、積蘆灰以止淫水。『淮南子』。

當堯之時、而洪水又横流者、『孟子』。其故有三。一因上古之時、地球軀殼炎熱尚未盡消、地球由太陽而分、故愈古則其氣愈熱。故堯時有「十日竝出」之謠。『淮南子』。而北極冰山因融而爲水、由北方而南流、以入中國西北部。時龍門未開、陝西近河處。呂梁未鑿、今永寧州東北。河出孟門今五門山。之上、『尸子』。浩浩懷山襄陵。『書』堯典。此水之由西北入中國者也。據西書『創世記』言、西國有洪水、苗族之文亦言洪水之事。而晉常璩『華陽國志』亦言、「蜀當上古時有水患」。蓋與中國洪水同時、皆冰山所化之水也。一因上古之時、中國亦爲澤国。據西人地質書説。厥後、洪流雖息、然東方近海、海水逆行、卽氾濫於中國。『孟子』。觀少昊以前之宅都由西東遷、少昊以後之宅都由東西遷、蓋中國地勢西高東下。少昊之後、洪水之患已露萌芽。東方地卑、久罹水患、故轉而西徙。至於帝嚳、而水患遂成、『越絶書』言、「堯遭帝嚳之亂後（『越絶書』では「之後亂」に作る）、則洪水滔天」、則洪水至帝嚳時已甚。至堯時、而洪水滔天矣。此水之由東方入中國者也。一因共工氏、見前課。欲防百川、墮高堙痺、以害天下。『國語』。與顓頊爭爲帝、振滔洪水、以薄窮桑。江淮流通、四海溟涬。『淮南子』（『淮南子』では「溟涬」に作る）。蓋共工士近江淮、見前課。其地多水、故以鄰國爲壑耳。此水之由東南入中國者也。

當此之時、邱陵高阜、盡爲水滅。『尸子』。民無所居、上者爲巢、下者爲窟、艸木鬯茂、禽獸逼人。『孟子』。堯用四岳言、使鯀治水。『書』堯典。鯀以息壤堙洪水。『山海經』。蓋鯀之治水、廣築堤防、以障水患。故潰決之後、爲患滋深、歷九年而水不息。『史記』。舜視鯀治水無狀、殛之於羽山。『史記』。復舉禹、使續父業。同上。更命伯益、

焚山澤以除禽獸。『孟子』。禹傷父功不成、『呉越春秋』。乃順水之性而導之、歴十三載而功成。『史記』。蓋鯀用障水之法、與水爭地、禹用分水之法、以地讓水也。

今觀禹治洪水、有就一州之水治之者、有就一山一川治之者。蓋禹之治水、由北而東、由東而南、復由南而西。及水道既疏、乃復就九州之中、次第施功、以期水患之盡平。首治冀州、既載壺口、今吉州西南。治梁今呂梁山。及岐、今狐岐山。修太原、今縣。以至岳陽。今霍山。定覃懷、今懷慶府。以至衡・漳。今清漳・濁漳。而恆・衞「恆」卽滱水、「衞」卽雷溝河。既從、大陸既作。今鉅鹿旁。次治兖州、道九河、卽徒駭・太史・馬頰・覆鬴・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津也。徒駭最北、鬲津最南、在今滄州・德州之間、今不可考矣。澤雷夏、今濮州東南。而灉・沮今濮州。會通。次治青州、略嶋夷、今登州。以道濰・今濰水。淄。今淄水。次治徐州、治淮・今淮水。沂、今沂水。而蒙羽蒙山在蒙陰縣。羽山在沂水縣。可耕。豬大野今鉅野縣。而東原今東平州。底平。次治揚州、而彭蠡今鄱陽湖。既豬、三江據班『志』則北江卽今大江、中江出蕪湖、南江出寧國、由浙入海。既入、震澤今太湖。底定。次治荊州、而江・漢入海、古時東方去海近、故古海潮直達武昌。『論衡』曰、「『江・漢朝宗於海』、唐・虞之前也」。九江今洞庭。孔殷。沱・今荊州府。潛今潛江縣。既道、雲夢今安陸府。作乂。次治豫州、既導伊・今伊水。洛・今洛水。瀍・今瀍水。澗今澗水。入河、復豬滎波、今滎澤縣。導菏澤、今曹州東。被孟豬。次治梁州、岷・今岷山。嶓今嶓冢。既藝、沱・今郫縣。潛今廣元縣。既通、蔡・今雅州。蒙今富平縣。旅平。終治雍州、先導弱水今山丹河。西流、復引涇・今涇水。漆・今耀州。沮・今沮水。灃今灃水。諸水使入渭河、今渭水。導荊・今富平縣。岐・今鳳翔府。終南・今長安縣・藍田縣・郿縣間。惇物今郿縣東。諸山、至於鳥鼠、今渭源縣。故原隰底績。至於豬野、今鎮番衞。而三危今山。可宅矣。此就每州之水治之者也。以上用禹貢、注文用蔣廷錫『禹貢地理今釋』。

雖然、兩山之間必有川、則兩水之間亦必有大山。魏源『書古微』。故禹於平奠九州後、復順山脈・河流、以導山・導水。導岍・今隴州南。岐、以至荊山、逾於河、由壺口諸山、東至碣石。今天津旁。此北榦山脈也。導西傾今洮州。諸山至太華、導熊耳今盧氏縣。諸山至陪尾、今泗水縣。復導嶓冢至荊山、今臨漳縣。導内方今鍾祥縣。至大別、今漢陽縣。此中榦山脈也。由岷山至衡山、今縣。復過九江至敷淺原、今德化縣。此南榦山脈也。至導水之法、大抵導江・淮・河・濟入海、稱爲「四瀆」。使北條之水盡歸河・濟、南條之水盡入江・淮。『孟子』言「淮・泗入江」、不可信。導河於積石、今河州。東至龍門・底柱・孟津、今孟津。直至大陸之東。又北播爲九河、同爲逆河、入於海。復導渭水於鳥鼠同穴、導洛水於熊耳山、同入於河、皆河水之支流也。導沇水東流爲濟、入於河、溢爲滎、東出陶邱北、今定陶縣。又東、至於菏、又東北、會於汶、今汶水。又北、東入於海、濟水三伏三通之説、實不足信。今姑依禹貢原文録之。此濟水之原委也。導淮水於桐柏、東會泗・今泗水縣。沂入海、此淮水之原委也。導江水於岷山、東過九江、至東陵今岳州。東迤北、會於匯、今鄱陽湖。東爲中江、今蕪湖。入於海。據『漢志』、當在今蘇・常間。又導漾今漢中。水於嶓冢、東流爲漢、又東爲滄浪水、襄陽南。南入於江、又東、匯澤爲彭蠡、東爲北江、入於海。據班『志』、則北江爲長江、中江另爲出蕪湖之水。而『禹貢』則以漢水爲北江、長江爲中江、蓋当時江水支派南流。卽今江水、則古漢水之下流也。此江水之支流而與江水別行者也。若夫導弱水入流沙、爲西行之水、導黑水、今瀾滄江。入南海、爲南流之水、與四瀆東流者不同。以上『禹貢』、注文用『禹貢地理今釋』。蓋山脈北榦・中榦之間爲河水・濟水、中榦・南榦之間爲江水・淮水。禹知山脈水流之原委、故以山界水、而水勢以分。此就一山・一川治之者也。美哉禹功。明德遠矣。『左傳』昭元年劉文公語。

至於商代、惟河水爲患、故殷代屢遷都、觀『書』注及『史記』可見。

然非若洪水之禍民矣。

〔現代語訳〕

洪水の災禍は、女媧氏の時より始まった。当時この世の四方にある柱が崩れ、九州は裂け、洪水は広がって止まることがなかった。そこで女媧氏は鰲の足を切って四極の代わりにし、蘆の灰を積み上げて洪水を堰き止めた。『淮南子』（覧冥訓）参照。堯の時も、洪水が起こったが、『孟子』（滕文公篇上）参照。その原因として三つある。第一の原因は、上古時代、地球の地殻は熱く燃えており、それが未だ消えていなかった。地球は太陽より分離したので、よって時代が遡るほど、大気に熱が帯びていたのである。[1] よって堯の時に十の太陽が同時に出たことが謡われた。『淮南子』（本経訓）参照。つまり北極の氷山が熱によって融け水となり、それが北方より南へ流れて、中国の西北部に入ったのである。その時、龍門も、陝西における河に近い場所を指す。呂梁山も未だ開鑿されておらず、今の永寧州（現山西省呂梁市）の東北部。河は孟門 今の五門山（現山西省晋城市内か）。のあたりから流れ出て、『尸子』参照。広い範囲で山や陵を覆った。『尚書』堯典篇参照。以上は水が西北から中国に流入した実例である。『聖書』創世記によれば、西洋において大洪水が発生している。また苗族にも洪水があったという伝承が残されており、東晋・常璩も『華陽国志』において、「蜀は上古において水害に見舞われた」と記している。おそらく（西洋と）中国における洪水発生が同時期だったのは、氷山から溶け出された水流のためであったと思われる。第二の原因として、上古の時、中国も沢など水多き国であったことが挙げられる。西洋の地質学の書に拠る。その後、洪水は止んだが、東は東海に近いため、海水が逆流し、またもや河川が氾濫した。『孟子』（滕文公篇上）参照。少昊以前の都が西から東へ遷ったのに対して、少昊以後の都が東から西へ遷ったのは、恐らく中国の地勢が西高東低であったためである。つまり少昊以後、洪水の被害の兆しが既に顕れていた。もとより東方は土地が低く、長い間水害に見舞われていたため、徐々に都を西へ遷したが、帝嚳の代になって、水害はますます激しさを増していった。『越絶書』（巻三）には「堯は帝嚳の後の混乱期に帝位に就いたが、当時洪水が天にまで漲っていた」とあり、ここからも洪水の被害が帝嚳の時代には甚大であったことが理解できよう。さらに堯の時には、洪水が天まで漲るようになった。以上は海水が東方から中国に流入した実例である。第三の原因としては、共工氏 前の課（第七課）参照。が百川を埋め立て、高地を削り低地を埋めた為に、結果として天下に被害をもたらした。『国語』周語下参照。（そもそも共工は）顓頊と帝位を争ったが（『淮南子』天問訓）、（舜の時も、その後裔が）洪水を引き起こし、水は窮（『淮南子』では「空」に作る）桑に迫った。（そして塞がれた土地に）江水・淮河が流れこんだため、辺りは一面果て無き海のようになってしまったのである。『淮南子』（本経訓）参照。思うに共工の領地は江淮に近く、前の課（第七課）参照。そこは水が多い。そのため鄰国をいわば（水を抜くための）溝としたのである。以上は江水が東南から中国へ流入した事例である。

その時、丘陵や高い阜でさえも、全てが水の底に沈んでしまった。『尸子』参照。人々は住む所が無く、高所にいる者はそこに巣を作り、低所にいる者は崖に窟を掘り、草木は生い茂り、人は猛獣に襲われた。『孟子』（滕文公篇上・滕文公篇下）参照。[2] そこで堯は四岳に命令を下し、鯀に治水を命じた。『尚書』堯典篇参照。鯀は（堯より窃んだ）息壤（不可思議な力を持った土壌）を用いて洪水を止めたとあるが、『山海経』（海内経）参照。おそらく鯀の治水法は、堤防を大規模に築き、水害を防いだと思われる。そのため堤防が決壊すると、その害はさらに拡大し、九年経過しても洪水は止まなかった。

『史記』（夏本紀）参照。堯の後を継いだ舜は、鯀の治水が無意味だったとして羽山に追放して殺害した。『史記』（夏本紀）参照。次いで禹を推挙して父の事業を継がせ、同上。さらに伯益に命じて、山や沢を焼き禽獣を駆除させたのである。『孟子』（滕文公篇上）参照。禹は父の功が成就しなかったことに心を痛め、『呉越春秋』（越王無余外伝）参照。水の性質に順って流れを定め、十三年で成功に導いた。『史記』（夏本紀）参照。思うに鯀は「障水（堤防を築く）の法」を用いて、水と土地を争ったが、禹は逆に「分水（別の水路を開いて放水する）の法」を用いて、水に土地を譲り対立しなかった。

今禹の治水法を検討してみると、一州内の水を治めた時もあれば、一つの山・一本の川を治めた時もある。思うに禹の治水は、北より東、東より南、そして南より西の順で行われた。水（の通り）道に江河の水を通した後、九州内において徐々に治水作業を行い、それにより洪水が全て収まることを期したのである。まず冀州を治め、次に壺口を、今の吉州（現山西省臨汾市）の西南（現在壺口瀑布として知られている）。そして梁山 今の呂梁山脈（現山西省西部）。および岐山を治めた。今の狐岐山（現山西省呂梁市内）。太原を治めてから、今は県。岳山の陽に至った。今の霍山（別名は太岳山、現山西省長治市内）。かくて覃懐 今の懐慶府（現河南省沁陽市）。の治水を終えてから東へ向かい、衡水・漳水 今の清漳河・濁漳河の二河川。にまで至った。また恒水・衛水 恒は滱水（山西から河北を流れる唐河）、衛は雷溝河（河北省石家荘市北を流れる滹沱河）。も順流した事で、大陸沢 今の鉅鹿の周辺（現河北省邢台市）にあった沢。において耕作が可能となった。次に兗州を治め、九河 徒駭・太史・馬頰・覆釜・胡蘇・簡・潔・鉤盤・鬲津を指す（馬融・鄭玄説）。徒駭が最も北、鬲津が最も南にあり、今の滄州（現河北省滄州市）・徳州（現山東省徳州市）一帯を流れていた。その他がどこを流れていたのかは考証できない。が通じ、雷夏 今の濮州の東南（現山東省菏沢市の東北）。もすでに沢となって、濰水・沮水 今の濮州。と合流した。次いで青州を治め、嵎夷も経略し、今の登州（現山東省煙台市・威東海市）。よって濰水・今の濰水。淄水 今の淄水（これら二河川とも山東省内を流れている）。の流れも通じた。そして徐州を治め、淮河 今の淮水（現在淮河は華北と華南の境界となっている）。沂水 今の沂水（現山東省南部から江蘇省北部を流れている）。の流れも治まり、蒙山・羽山 蒙山は蒙陰県（現山東省臨沂市の西北）、羽山は沂水県（現山東省臨沂市・江蘇省連雲港市の境）にある。では植樹が可能となった。大野沢 今の鉅野県（現山東省菏沢市内）にあった。には水が貯えられ、東原 今の東平州（現山東省泰安市）。は洪水が収まり平穏となった。次に揚州を治め、彭蠡（沢）今の鄱陽湖。は水をたたえ、三江『漢書』地理志によれば、北江は今の長江の本流、中江は蕪湖から分流し、南江は寧国府（安徽省宣城市内）から分流して、浙江を経由して東海に注いでいた。[3] は東海に流れていき、震沢 今の太湖。においても洪水が起こらなくなった。続いて荊州を治め、その結果、長江・漢水も逆流することなく東海に流れ、古において東方は海に近く、そのため古の海潮は武昌にまで達していた。『論衡』（書虚篇）にいう、「（禹貢篇の）『江・漢、海に朝宗す』とは唐・虞の前なり」。九江 今の洞庭湖（朱熹、蔡沈（一一六七―一二三〇）など宋儒の説に拠る）。の水量も大いに増大した。さらに沱江 今の荊州府（現湖北省、現華容河か）。潛江 今の潛江県（現湖北省潛江市）。の流れを通し、雲夢沢 今の安陸府（現湖北省孝感市）。も耕作が可能となった。そして豫州を治め、伊水・今の伊水。洛水・今の洛水。瀍水・今の瀍水。澗水 今の澗水 は黄河に流入し、滎波 今滎沢県（現河南省鄭州市内）。も水をたたえ、その他菏沢 今の曹州（現山東省菏沢市一帯）の東。を経由して、孟豬沢（現河南省商丘市内。『周礼』夏官・司馬篇では「望諸」、『史記』夏本紀では「明都」に作る）に水を引いた。次は梁州を治め、岷山・今の岷山。嶓山 今の嶓冢山（現

陝西省漢中市内）。は植林され、沱水・今の郫県（現四川省成都市）。潛水 今の広元県（現四川省広元市）。は流れが通じ、蔡山・今の雅州（現四川省雅安市）。蒙山 今の富平県（現陝西省渭南市内）。中の道も整備された（清・王引之『経義述聞』巻三「蔡蒙旅平」中の所説）。そして最後に雍州を治め、先ず弱水 今の（現甘粛省西北部を流れる）山丹河。を西に流し、さらに涇水・今の涇水（渭水の支流）。漆水・今の耀州（現陝西省銅川市）。沮水・今の沮水（漢水の源流）。澧 今の澧水（咸陽で渭水に合流）。などの水を渭河 今の渭水。に合流させ、その後、荊山・今の富平県。・岐山・今の鳳翔府（現陝西省宝鶏市）。終南山・今の長安県（現西安市長安区）・藍田県・鄠県（現宝鶏市内）の境に位置している。惇物山 鄠県の東。の諸山を経て、鳥鼠山 今の渭源県（現甘粛省定西市内）。に至った。こうして高く乾燥した土地も低い湿地も整備され、豬野沢 今の鎮番衛（現甘粛省武威市民勤県）。にまで至った。よって（人々が）三危山 今（甘粛省敦煌市東南にある）山。に居住することができるようになった。これが州ごとの水を治めた事例である。以上、本文は『尚書』禹貢篇、注釈は蔣廷錫（一六六九―一七三二）『禹貢地理今釈』に拠った。しかしながら、（『周礼』冬官考工記にあるように）「二つの山の間には必ず川が流れている」ならば、二本の川の間にも、必ず大山が存在する。魏源『書古微』（巻四・釈道山三条四列）参照。そのため禹は九州を平定した後、今度は山脈・河流に沿って、「導山（山脈に従って治水を行う。）」「導水（川を通す）」を行った。岍山・今の隴州の南。岐山を治めて、荊山に至り、黄河を越えて、壺口の諸山より、東行して碣石山に至った。今の天津近く。ここを北幹山脈という。西傾山 今の洮州（現甘粛省甘南チベット族自治州一帯）。の諸山を治めて太華山に至り、次いで熊耳山 今の盧氏県（現河南省三門峡市内）。などの山々を治めて、陪尾山 今の泗水県。に至った。そして嶓冢山を治めて荊山 今の臨漳県（河北省邯鄲市）[5]に至り、その後内方山 今の鍾祥県（湖北省荊門市内）。を治めて大別山 今の漢陽県（現湖北省武漢市内）。に至った。ここを中幹山脈という。岷山より衡山、今の衡山県（現湖南省衡陽市）。さらに九江を渡って敷浅原山 今の徳化県（現江西省九江市）。に至った。ここが南幹山脈である。導水の法については、まず長江・淮河・黄河・済水を導いて東海に流入させることを「四瀆」とした。そして北を流れる水すべてを黄河・済水に、南を流れる水すべてを長江・淮河に合流させた。『孟子』（滕文公篇上）の説く「淮・泗は江に入る」は信じることはできない。黄河は、積石山 今の河州（現甘粛省臨夏回族自治州）。より東流して、龍門・底柱・孟津 今の孟津県（現河南省洛陽市孟津区）。に至り、そのまま中国大陸の東まで流れた。北に向かって拡がり流れた河を九河とし、後にそれらは合流して逆河となり、東海に注いだ。また渭水は（現甘粛省中部の渭源県にある）鳥鼠同穴（鳥鼠山）、洛水は熊耳山からそれぞれ流れ、黄河と合流した。（この三川が）黄河の支流である。沇水は東流して済水となり、その後黄河と合流するが、溢れた水は滎沢に貯まり（氾濫を防いだ）。その後水は陶邱の北まで東流し、今の定陶県（現山東省菏沢市）。その方角のまま菏沢に注ぎ、次いで東北へ流れて汶水 今の汶水（現大汶河）。と合流、一旦北へ流れ、その後は東流して海に注いだ。済水の「三伏三通」説は、実際信じることはできない。[6]今はとりあえず禹貢篇の原文を茲に記載する。これが済水の源流とその流域である。淮水は桐柏山（現河南省南陽市内）より東へ流れ、泗水・今の泗水県（現山東省済寧市内）。沂水と合流して東海に流入した。これが淮河の源流と流域である。長江は岷山より東流して九江を過ぎ、東陵 今の岳州（現湖南省岳陽市）。に至り、東へ流れた後に斜めに北流し、水が集まる湖水 今の鄱陽湖（現江西省北部）。において一旦合流し、その後東流して中江 今の蕪湖（現安徽省東南部）。となり東海に注いだ。『漢書』地理志によれば、今の蘇

州・常州一帯である。**さらに漾**今の漢中府。**水は嶓冢山より発し、東に流れて漢水となった。さらに東流して滄浪水**襄陽（現湖北省襄陽市）の南。**となり、南に向かって長江と合流した。その後東に向かって彭蠡沢（鄱陽湖）に流れ込み、その後東に向かい北江となって、海に流れ出た。**『漢書』地理志に拠れば、北江は長江であり、中江は別に蕪湖から流れ出た水。一方『禹貢』では漢水を北江とし、長江を中江、すなわちおそらく当時の江水の支流として南へ流れていた江、とした。そうであれば今の長江は、古の漢水の下流となる。(7)**この流れが長江の支流、または長江の分流である。その他弱水が流沙へ流れ、西流の水であったこと、また黒水**今の瀾滄江（メコン川上流域）。**が南海に注ぎ、南流する事は、四瀆が東流したこととは異なっている。**以上は禹貢、注釈の文は『禹貢地理今釈』に拠った。**思うに北幹山脈と中幹山脈の間では黄河・済水が、中幹山脈と南幹山脈の間では長江と淮河が流れている。禹は山脈と水流の源とその流域を理解し、そこで山に沿って水を区切り、加えて水の流れに拠ってさらに区分を重ねたのである。これが、禹が一つの山・一本の川に従って治山・治水した事績である。まさに「美なるかな禹の功。明徳は遠し」**『春秋左氏伝』昭公元年劉文公（正しくは劉定公、すなわち劉夏）のことば。**である。**

商代に至っても、河水は災害を引き起こしたが、よって殷代は数次遷都した。その事は『尚書』注及び『史記』を見れば明らかである。**（上古の時代）洪水が民にもたらした災禍には到底及ばない。**

〔注釈〕

（1）劉氏は「講地理的概略」（『中国白話報』第十六期、一九〇四年所載）において、原始地球は火と気によって構成され、その中の油質が火と融合したことにより発火したこと、その後、燃焼が止まったことにより冷却化して地殻が生成されたこと、内側の気が水に変化したことなどを述べている。原始地球が燃焼していた原因を太陽から分離した直後であったとした『教科書』本文の解説と相違している点で興味深い。

（2）『孟子』滕文公篇下「堯の時に当たり、水逆行し、中国に氾濫す。蛇龍之に居り、民定まる所無し。下なる者は巣を為り（低地に居していた者は木に登って巣を作り）、上なる者は営窟を為る（高所に居していた者は崖に穴を穿ってそこに住んだ）」とあり、文脈上この方が適切であろう。

（3）『尚書』禹貢篇に見える「三江」がいずれの江を指すのかについて、顧頡剛は「尚書禹貢注釈」（『中国古代地理名著選読㈠』香港中華書局、一九六三年所収）一八頁において四つの説を紹介している。㈠鄱陽湖より下流で、北・中・南の三つに分かれた長江の分流。『漢書』地理志、『初学記』巻六所引の鄭玄・孔安国注「左（北）に漢と合して北江と為り、彭蠡に会して南江と為り、岷江は其の中に居りて、則ち中江と為る。故に『書』に東して中江と為ると称すは、明けし岷江彭蠡に至りて南北と合し、始めて中と称するを得るなり」。㈡長江の上・中・下流を「三江」とする。南唐・徐鍇（九二一―七五）『説文解字繫伝』通釈篇巻二十一参照。㈢長江本流を「北江」、太湖を源とする呉淞江（または蘇州河）を「中江」、銭塘江を「南江」とする。『水経注』巻二十九「沔水」所引郭璞注参照。㈣中江が太湖に流入し、その後呉淞江・東江・婁江の三江に分かれたことを指す。蔡沈『書集伝』参照。

（4）中国の山脈について、劉氏が引いた『漢書』地理志や馬融は、岍山からを北条、西傾山からを中条、嶓冢山からを南条とし、鄭玄は、岍山からを「陰」、西傾山からを「次陰」、嶓冢山からを「次陽」、岷山からを「陽」と区分した。また蔡沈などの宋儒は、「導」の字に着目して、岍山からを北条、嶓冢山からを南条として二分している（『書集伝』巻二）。それに対し劉氏は、岍山からを北幹山脈、西傾山からを中幹山脈、岷山からを南幹山脈として、馬融説と鄭玄説を折衷している。

（5）原文「臨漳県」を、劉氏が拠った蔣廷錫『尚書地理今釈』では現湖北省襄陽市内の「南漳県」と考証しており、劉氏の誤記と思われる。

（6）済水の「三伏三見」説について、宮崎市定「水経注二題」（『全集』一七、岩波書店、一九九三年）は、済水が「地の中でも他の水の中でも他と雑らずに潜って行く」という説を紹介している。例えば明・章潢（一五二七―一六〇八）『図書編』巻五十四には「按ずるに酈道元（『水経注』「済水」）に謂う、済水は王莽の時に在りて枯竭す、と。鄭樵（一一〇四―一一六二）『通志』（巻四十）も亦た曰く、済水多く涸竭す、と。今より之を観れば、済水は勁疾にして、能く地に穴ほり伏流す。隠見常無きは

乃ち其の本性にして、真の涸竭に非ざるなり。済水は既に地中に伏流して、則ち地を発けば皆な泉なること、又た特に歴下（現山東省済南市）の諸邑のみ然りと為さず。是の故に一見して済源と為り、再見して滎水と為り、三見して山東の諸泉水と為り、溢れて大小清河と為るも、其の実は皆な済水なり」とある。ただし劉氏自身は本説を否定している。

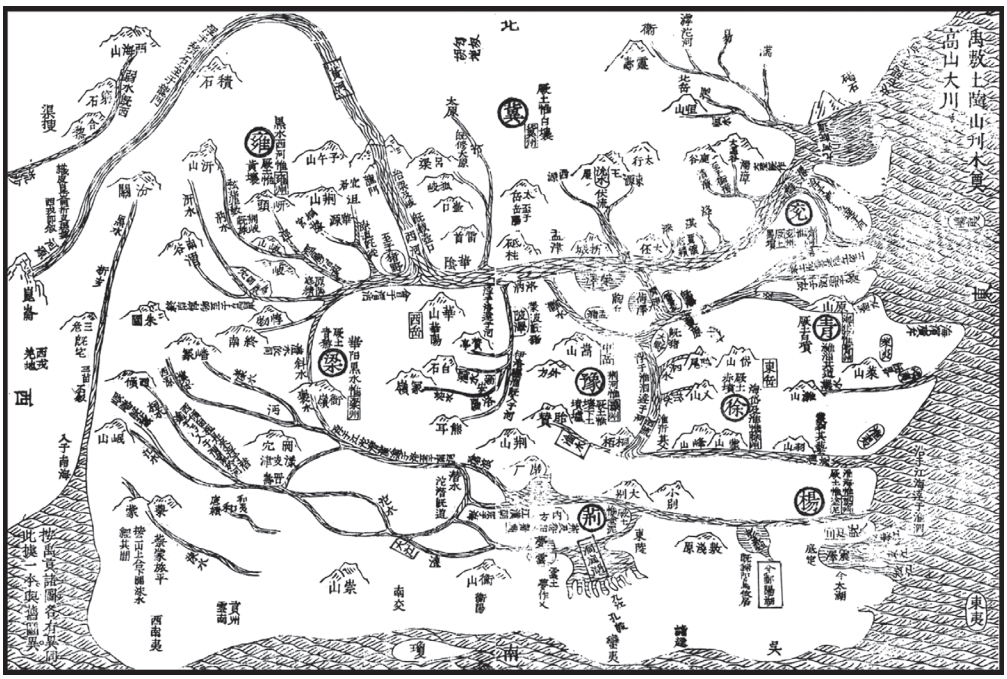
（7）劉氏は彭蠡沢、すなわち鄱陽湖以西の長江の流れが、北・中・南の「三」つの「江」に分流し、北江を長江本流、中江を現安徽省蕪湖で分流した江、南江を現安徽省宣城市付近で分れ、浙江へと向かう江と考えた。ここで劉氏は『漢書』地理志と禹貢篇を調停し、長江水系に属する諸江が、現江西省北部に位置する鄱陽湖で一旦合流、その後現湖北省武漢市で「北」から流れてくる漢水とも合流することを踏まえて、古の漢水と今の長江を「北江」として同一のものとした。それにより『漢書』地理志が説く北江＝長江説と、禹貢篇が説く北江＝漢水説の間には矛盾がないとした。次に禹貢篇中の中江＝長江説について、劉氏は中江を、古代、長江本流の南を流れていた支流と見做していたのではないだろうか。

〔訳注者後記〕

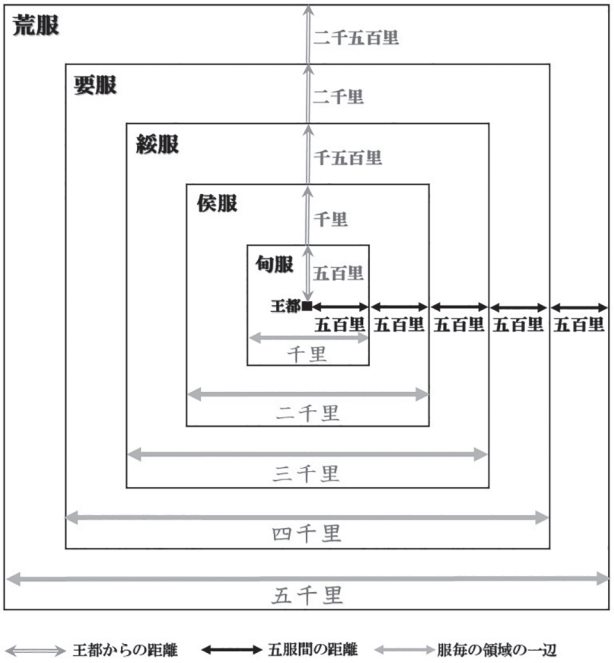
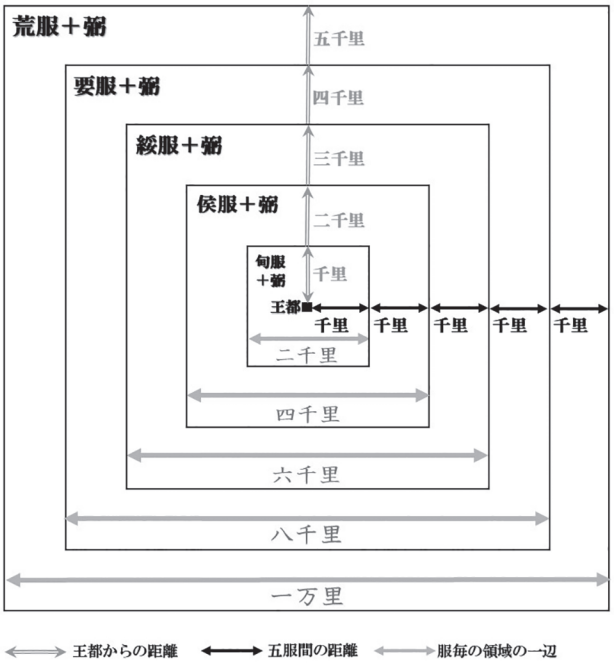
本訳稿は平成二十八年度―令和四年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号一六K〇二一五四　研究代表者　井澤耕一）、令和四年度―令和七年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号二二K〇〇〇五二　研究代表者　井澤耕一）及び令和四年度―令和五年度科学研究費若手研究（課題番号二二K一三二一九　研究代表者　佐々木満実）の研究成果の一部である。

（いざわ・こういち　本学部教授）
（ささき・まみ　お茶の水女子大学基幹研究院研究員）

松本愚山（一七五五―一八三四）『五経図彙』巻上（一七九一年刊）
「禹貢」九州絵図（訳注者による書き込み及び編集あり）



①堯時代の「五服制」（鄭玄説）



②禹時代の「弼成五服」（鄭玄説）